

アンドレ・クライン氏をお招きして

「アルザス、その歴史とヨーロッパでの位置、そして日本との関係」

André Klein
 アンドレ・クライン

イラクの戦後処理を巡って米国と仏独を中心とするEU諸国との意見対立がニュースで話題になっている。ヨーロッパ議会がおかれているアルザス地方と日本との交流に長年尽力されてきたアンドレ・クライン氏を関西日仏学館にお招きしての講演会が10月11日に開催された。講演の前半はフランスとドイツが国境を接するアルザス地方の古代史から、何度も繰り返された悲惨な戦争のたびに仏独間でやりとりされた歴史を通じ、ヨーロッパ議会がおかれるようになる長く重い歴史が詳しく語られ、後半はその歴史によってつくられた民族性、国際性をもとに、日本との深い関係が築かれていったいきさつが歴史、経済、文化的背景とのかかわりとして熱く語られた。終了後多くの方がこれほどアルザス地方と日本との間に関係があるとは全く知らなかったという感想をのべられていたのが印象的である。クライン氏の物静かな風貌と日本に対する決して表面的でない深い愛情を感じられた方も多かったようだ。



ヨーロッパの歴史の中におけるアルザス地方

アルザス地方はシーザーのガリア戦記にはじめて登場する。人口170万人の小さい地方で地理的にヨーロッパの中心部に位置し、陥没と隆起を繰り返しながら、左右をボージュ山系とシュワルツバルトにはさまれ、中心部にライン河がゆったりと流れる肥沃な地方にある。このラインの流れを用いての交易の中心地として幾つかの都市が形成される。中世には、ドイツ帝国に統合され、自由都市や、アルザスに最も古い起源をもつハプスブルグ家に深い関わりのある、小さな公国で、17世紀、宗教戦争の後で、国王ルイ14世は、アルザスをフランスに帰属させた。そして、フランス大革

命とナポレオン時代、2世紀の間、アルザスは、フランスであり続けた。1871年、普仏戦争以来、ドイツ領になったりフランス領になったりして、国名を4回も変えた。この不安定な歴史は、アルザスに大変な苦痛を与えた。仏独間の戦争は、アルザスの地で行われ、その結果、多くの犠牲者と破壊をもたらしたし、人々は、2つの国の間で、民族を引き裂かれる精神的苦痛を受けてきた。こういう歴史的背景が独特の文化を形成する、それが今日の観光資源となっているし、高い大学のレベルと音楽、演劇、料理などに色濃く、この歴史をきざみ、まじめで粘り強い人的資源を形成していくこととなる。この国の人々ほど戦争というもののもごさを知っている人々もないし、国境というものの無意味さを痛感している人々もないといえる。第2次世界大戦の最後はアメリカ軍により開放され、フランス領となって現在に至っている。戦勝国とはいえ、ヨーロッパは疲弊しきっていた。そこから起こってきたのが汎ヨーロッパ主義である。意見の異なる、文化的背景の異なる、敵として殺しあってきた国々が手をたずさえてひとつの共同体を形成するというこの壮大な計画が実現する第1歩となるのが、アデナウア総裁とド

ゴール將軍との間で1963年にパリで調印されたエリゼ条約である。それから40年がたち、いまやE.U.の存在を否定する人はだれもいないところまできたのである。

日本とアルザスの経済と文化交流の歴史

アルザスの人々は、フランス語とドイツ語の両方を使用し、異文化を広く受け入れる能力を持っている。今日、アルザスでは、経済分野において、フランスで最も多く、そしてヨーロッパで最も多いのだが、産業分野の45パーセントの人々が、外国の企業で雇用されている。

アルザスは、持ち前の国際性で日本との交流を作り出した。東京に常設の事務所を設置し、広報や交渉の活動し、アルザス開発公社の職員が出張した。さらに文的なアルザスと日本との交流を進展させた。フジテレビがアルザスの村で撮影した連続ドラマ「アルザスの青い空」の上映放送など、アルザス独特のイメージが、日本で少しずつ、つくられていった。

経済界の代表団がアルザスを訪れ、多くの交流が生み出されていく課程で、日本の学校建設の企画が持ち上がり、1986年4月に、フランス語教育を重視しながら、日本の教育方針にそった教育を受けることができるアルザスの成城学園が開校した。

1986年11月のソニーの工場誘致が、最初の日本アルザス関係の成功例である。ソニーの誘致から、リコー、シャープ、ヤマハ、三井、つい最近ではT H Kがやって来た。また、ストラスブールへの日本領事館も設置された。

日本企業のアルザスへの人気の理由の1つに、アルザスが3億2千万人の人口が集中している全西ヨーロッパ市場の半径500km内にあること、しかも、ヨーロッパの購買能力の70パーセントが集中している格好の場所にあることだ。他の理由として、フランスとドイツの気質によって形成された熟練した下請業者の組織網や伝統があること、また特殊な自然環境などがあげられる。ここに住む日本人は、アルザスの風景が大変気に入っているようだ。

ブドウ畑の存在は、非常にアルザスの価値を高めている。ブドウ畑のある地方の人々は、時間への感覚を持ち、異なる世代の間での結びつきがあり、日本人のこころと基本的な特徴が似ていると日本企業の責任者は話している。

アルザス日本学研究所の創立と日本との文化交流

日本とアルザスの関係を作るために、相互理解のための努力が必要だった。盛んな交流、成城学園、ストラスブール大学での日本文化や日本語の授業、すべてが、日本との交友関係を深化させた。

2001年1月に、アルザスは日本文化を理解することを課題に、アルザス日本学研究所(C.E.J.A)を創った。クライン氏はその代表でもある。

C.E.J.Aは、特に、アルザス地方、ライン河上流県、コールマール市や企業など、アルザスの団体によって、財政的に支えられている。

この研究所は、フランス、ヨーロッパと日本の大学の共同研究者によって支持されている。そして、アルザスに、大手新聞社、企業の幹部や技術者に、最近の日本文化を伝え広める場所、文化部門の機能を持っている。この研究所は、マーク・ブロック大学(ストラスブール第二大学)日本語・日本文化学科が研究指導を行い、日本の色々な分野について研究している多くの国の研究者、大学教員や大学院生に、研究活動の場を与えている。

(要訳/三石 博行)

Hiroxuki MITSUISHI



アルザスの中心都市ストラスブール市リパブリック広場にあるこの像は戦争によって、一人の息子はドイツ兵として、もう一人の息子はフランス兵として徴兵され互いに戦うことになった息子の遺体を抱えて悲嘆にくれる母親の像であり、平和への祈りである。